清流と深緑のテーマパーク

～奥入瀬渓流、十和田湖～

総　務　部　主事　島　田　久美子
業　務　部　主事　長　張　由　紀

“春は新緑、夏は深緑、秋は紅葉、冬は墨絵のような幽玄な世界”と、年間を通して観光客の目を楽しませてくれる十和田湖八幡平国立公園、私達はその中心である奥入瀬渓流・十和田湖を訪れました。

十和田湖から流れ出す唯一の川、奥入瀬渓流を下流の石ヶ戸（写真１）から上流へと主な滝14か所を探しながら遡って行きました。なかでもみごたえのある滝の一つが雲井の滝（写真２）、落差が20mあり水量も豊かなために浸食され、ずいぶん奥まったところにあります。そして奥入瀬本流にかかる唯一の滝、銚子大滝（写真３）、落差７m、幅20m。「なるほどこれが魚止めの滝と言われていた滝か。」と納得。辺りが白く霞むほどしぶきをあげ清涼感一杯。渓流散策のクライマックスに相応しい堂々たる姿です。

（写真１）石ヶ戸の瀬

奥入瀬渓流は川と歩道、車道が同じ高さになっており三者一体で散策が楽しめるのが特徴とか。実際、上から流れを眺めるのとは違い、真近に迫力を感じることができます。

（写真２）雲井の滝

翌日、前夜からの大雨はすっかりやみ、晴れ女二人は十和田湖畔の休屋から子の口まで一時間ほど遊覧船に乗りました。船は、湖の中央に向かって両腕のように伸びている中山半島と御倉半島を巡り、その両半島に囲まれた中湖を周遊します。ここは水深 327mの最深部。そこで船は 360度旋回し、大パノラマ景色、外輪山の山々や、コバルトブルーの水面を私達の目に焼きつけてくれました。ゆったり流れる時間と豊かな自然を体中一杯に味わい、まるで自分が湖の中にポッカリと浮かぶ小さな島になったように楽しめました。休屋には十和田湖が国立公園に指定された15周年を記念して、昭和27年高村光太郎によって造られた乙女の像があり、近くで見るとかなりグラマーなプロポーションです。そのプロポーションのおかげ（？）か、十和田湖観光の人気スポットのひとつになっており、記念撮影をする人々が多く訪れています。（写真４）

（写真３）銚子大滝

このように見どころ一杯の自然の宝庫には、年間 300万人もの観光客が訪れます。そうなると悲しいかな、当然のように出てくるのがゴミの問題です。“自分のゴミは自分で持ち帰る”誰もが出来るはずのそんな簡単なことが、この雄大な自然を次代にまで引き継ぐことができる大切な“鍵”となり得るのです。「この自然は十和田だけのものではなく国民全員の財産。十和田湖、奥入瀬渓流は自然そのもののテーマパーク。日常の生活を忘れ、自分の足で時間を掛けて散策してほしい」と十和田湖町役場の方が語ってくれました。

（写真４）乙女の像

今でもふと目を閉じると、肌寒いほどの水しぶきをあげ、苔のにおいが立込めていた奥入瀬の流れや、太陽に反射して眩しいほどに輝く十和田湖の青々とした湖面を思い出すことができます。いつかまた訪れたとき、この素晴らしい自然がどうかそのままの姿で私たちの心を癒してくれるよう願って止みません。